

フィンランドクロスカントリーチームはなぜ再び強くなったのか？

トップスポーツマネジメントコース

5015A308-8 倉田 秀道

研究指導教員：平田 竹男 教授

1. 背景

歴史的に冬季オリンピックおよび世界選手権のメダル獲得数上位でノルディックスキー強豪国であるフィンランドのクロスカントリーチームは、2001 年および 2002 年のドーピング事件により一旦チームは弱体化した。しかし、ほぼ時を同じくして、フィンランドのオリンピック委員会（以下、NOC）とスキー連盟（以下、NF）によるコーチの適正化とジュニア選手層のボトムアップのための改革が着手されていた。この改革の結果、新たなコーチ陣による若手選手の強化が進展、2009 年から 2010 年を境に成果が出始めた。2014 年冬季五輪ではメダルを 3 個獲得し上位 10 傑に 9 選手が入るなど V 字回復的な復活を果たしてきた。同時にジュニア選手についても、ジュニア世界選手権において、男子は 2011 年に銅メダル 3 個、女子は 2010 年に金メダル 1 個、銅メダル 1 個を獲得し、強化がすすんだ。

筆者は 2007 年から 2011 年の間、(公財) 全日本スキー連盟の強化に携わったが、その間の日本代表チームは元フィンランドチームヘッドコーチである Pekka Vähäsöyrinki 氏のアドバイスを得ていた。幸いこの期間がフィンランドチームの浮上のためのまさに重要な期間であった。この改革は選手の強化、コーチ教育および育成に注力したことが特徴として挙げられることを同氏から聞いていた。さらに、サービスマン（以下、ワックスマン）の育成制度、コーチの経済的保証をする制度、地域での選手強化を担う機能およびコーチやワックスマンの育成を担う機能を有するトレーニング拠点の存在などフィンランドの体系的な強化策が浮き彫りとなった。

コーチ教育・育成に関する先行研究は、継続的なコーチ教育の環境を示唆した Tiffanye Vargas-Tonsing (2009)、ドイツにおけるコーチ養成システムと運用を明らかにした川口 (2011) など他競技に関する論文がある。また、選手の強化に関する先行研究は、スウェーデンのクロスカントリースキーの練習内容を明らかにした Tim Gibbons (1998)、韓国におけるプロゴルファーの強化・育成を明らかにした井上 (2010) など他競技の論文があるが、いずれもクロスカントリースキーの強化に関して体系的に示したものはほとんどない。

2. 目的

2001 年、2002 年のドーピング事件により低迷したフィンランドクロスカントリーナショナルチームは 2006 年トリノ五輪で 1 つ、2010 年バンクーバー五輪で 2 つ、2014 年ソチ五輪で 3 つのメダルを獲得するのみならずあらゆる年代の国際舞台のトップ国として復活を遂げた。本研究ではそこに至る強化策を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

Valmennuskeskustenkehitystyöryhmänmuistio(2000)、NYKYTILANS ELVITYSEHDOTUKSET KEHITTÄMISTOIMENPITEIKSI(2004)、LoppuraporttiValmentaja-ja ohjaajakoulutuksen kehittämishanke VOK (2005–2010) (2011)、A FOLLOW UP STUDY OF FINNISH COACHES (2015)などの文献により時

系列での動きを把握した。また、具体的な内容については、文献調査と NOC、NF および Olympic Training Center 関係者へのインタビューおよびメールによる聞き取り調査を行い、コーチ育成制度とその他強化に係る制度、ワックスマン育成制度とその活動、トレーニングセンター拠点の役割などについての情報収集を行い、「フィンランドの特徴的な施策」と「運用方法」に特に注目して整理した。

4. 結果

フィンランドでは、コーチとワックスマンそれぞれの教育・育成プログラムおよびコーチを経済的に支える仕組み、選手強化のベースとなるトレーニング拠点およびコーチやワックスマンの育成を行う拠点が存在することが明らかになった。これらの制度や仕組みの効果的活用がフィンランドクロスカントリーチームの全体強化策となっていた。

(1) コーチを教育・育成する制度

NOC、NF にはそれぞれにコーチ育成制度が存在し、5 段階で構成されていた (表 1)。NF で運用するコーチ教育・育成制度は、レベル I ～Ⅲの 3 つのレベルで区分化されており、NOC によるコーチ教育・育成過程は、NF の 3 つの資格の上位コース (レベルⅣ、レベルⅤ) で、国際的なコーチ育成の仕組みとなっていた。

表 1 コーチ育成制度

	レベル	目的	主管
I	地区	インストラクター養成	NF
	地区	スキーコーチ養成	NF
II	全国	スキーコーチ養成	NF
III	全国	スキーコーチ養成	NF
	トレセン	ナショナルコーチ(VAT)	NF
IV	国際	プロコーチ養成	NOC
V	国際	プロコーチ養成(修士)	NOC

レベル I がいわば初級であり地域のジュニア指導を中心に行うコーチの資格、レベル II はクラブチーム又はジュニア選手のパーソナルコーチ指導ができる資格、レベル III は国際大会派遣基準となりナショナルチームコーチへの道も開かれている資格であった。レベル IV は、フィンランド国内にある High Performance Centers (=Olympic Training Center) で担う育成課程で、プロコーチを目指すものである。レベル V は、更に高度なユヴァスキュラ大学と連携した修士課程での育成制度である。フィンランド・ナショナルチームのコーチの多くは、この修士課程修了者であり、2015 年では、25 名から 30 名ほどが修了者としてコーチ登録されていた。

(2) ワックスマンを教育・育成する制度

NF では、ワックスマンを育成し、選手へのサポート機能を強化していた。具体的には、ワックスマン教育・育成の枠組みが Vuokatti Olympic training Center を拠点として実施され、サービスマンクラブと呼ばれるワックスマン教育修了者を登録する組織を構築していた。ワックスマンの教育には 3 つのレベル体系が設定されていた (表 2)。

表 2 ワックスマン育成制度

	レベル	目的	主管
導入	クラブ	基本の理解	NF
I	地区	サービスマン養成	NF
	地区	ワックス技術習得	NF
II	全国	サービスマン養成	NF
	全国	ワックス技術習得	NF

これまでに 150 名以上がこの教育課程を修了し、そのうち 25 名前後がワックスマン登録されていた。冬季シーズン中、彼らはオリンピック・世界選手権・W 杯やジュニア世界選手権など必要な場合にワックスマンとして帯同していた。これにより W 杯では 10 名から 15 名、オリンピック・世界選手権では 20 名から 30 名のワックス体制を可能にしていた。さらにオフシーズンには、スキーマーカーの工場に赴きナショナルチーム選手のマテリアルの選定および確保、スキーマーカーの滑走性テスト、遠征中の移動手段検討などの業務を担っていた。

(3) コーチ、ワックスマンを支える仕組み

コーチがナショナルチームに就任する際には、基本的に冬季オリンピック終了後の 6 月から 4 年専任契約を結んでいた。所属先の職場を離れるため、4 年後に所属先（多くの場合体育学校やトレーニングセンター等）に復帰できる労働協約が締結されていた。これは、EU 圏スタンダードの協定であり、NOC とコーチ協会に設置されているプロコーチの労働組合である「SAVAL」が労働協約を締結し、コーチの身分や経済的負担などを保証するものであった。これにより、ナショナルチームコーチはフルタイムで選手の指導に専念できる体制となっていた。また、ワックスマンの活動に対しても一部活動費用が配分されているが詳細は不明である。

(4) トレーニング拠点

トレーニング拠点は 2 つの機能を有していた。

①強化システム

NF では次代の中核選手を育成するため、主に 14 歳から 20 歳をターゲットに 4 つのブロック（Lahti(南)、Jyväskylä(西)、Vuokatti(東)、Rovaniemi(北)）で育成が行われていた。各ブロックで選考された選手は、NF が指定する 3 つの強化トレーニング拠点（Vuokatti, Rovaniemi, Voyri）で育成されていた。2015 年、この内 16 歳から 17 歳の 58 選手を選抜し、チャレンジングチームとしてナショナルチームの管轄下で強化を行っていた。現在トップチームで活躍している選手のうち 4 選手はジュニア時代からこの仕組みで育成された選手であった。

②コーチ、ワックスマン教育・育成システム

1990 年代にトレーニングセンター設置動向が加速した。その後、2001 年から 2004 年の間、教育文化省、NOC 主導でトレーニングセンター開発プロジェクトが始動し、5 つのトレーニングセンターが構築された。主な機能は、ナショナルチームのトレーニングおよびコーチ教育・育成である。2014 年にはオリンピック強化の中核拠点に認定され、このうち Vuokatti は冬季競技唯一の拠点としてコーチ・ワックスマンの育成と、クロスカントリーチームの強化を担っていた。

(5) 競技成績とスポンサー数

フィンランドクロスカントリーチームの競技成績（メダル獲得および 4 位から 10 位）とスポンサー数の経年比較をみると、ドーピング発覚(2001)を境に成績低下とともにスポンサーが激減したことがわかる（表 3）。とりわけ、2002 年冬季オリンピック、2003 年ノルディックスキー世界選手権ではメダ

ル獲得 0 であったが、その後、2009 年以降を境に、強化の進展とスポンサー数増加が比例していることが明らかとなった。

表 3 スポンサー数

年 (期分け)	'98-'99 (dp 前)	'02-'03 (改革初期)	'05-'07 (改革中期)	'09-'11 (改革後期)	'13-'15 (現在)
WJC※1	2	3	1	5	0
OG+WSC※2	8	0	7	14	5
OG+WSC (4-10 位)	6	9	15	22	26
スポンサー※3	約 27	約 2(4)	約 6	約 30	約 28

※1 ジュニア世界選手権

※2 冬季オリンピック+ノルディックスキー世界選手権

※3 データが古く各種資料の合算により集約したためおおよその数字で表記

5. 考察

フィンランドの国民的スポーツであるクロスカントリーの復活は、スポンサーなど資金面の回復、トップ選手のみならず地域の指導者やトップコーチ、ワックスマンなどの人材輩出につながっていた。これはまさに「逆台形モデル」の成功事例と言える。一方で、フィンランドの復活に影響した強化策には学ぶべき点も多く含まれている。

(1) トレーニングスキル、人間力、マネジメントスキルなどレベルの高いコーチ教育・育成制度は、コーチの資質を高める礎であろう。ナショナルコーチの多くがその課程の終了者であることが選手指導力の高さを維持している大きな要因であると思われる。

(2) ワックスマン教育・育成制度を修了し経験を積んだ 25 名から 30 名が登録されていることは大きな財産である。とりわけ、試合期にワックスマンとして選手のスキーサービスを行う要員体制はまさに勝敗を分ける要になるであろう。

(3) ナショナルコーチの身分および経済的保証により、強化に邁進できる環境が整備されることになる。これにより、選手への一貫指導につながり強化が加速すると思われる。

(4) トレーニングセンターをジュニア選手の育成拠点、コーチやワックスマンの人材育成拠点と位置づけ、仕組みとして機能させていることが有効であると思われる。とりわけ、Vuokatti を中心に強化の求心力が増強されると思われる。

今回の研究では、ワックスマンの具体的活動、コーチを支える仕組み、ジュニア選手層の具体的強化策などの詳細に課題が残った。これらについては今後さらに研究が必要となる。

6. 結論

ドーピング事件により低迷したフィンランドクロスカントリーチームが復活を遂げた強化策として、NOC、NF による 5 段階のコーチ育成制度、NF による 3 段階でのワックスマンの教育・育成があった。さらに、次世代選手を育てる仕組みとして国内拠点での強化、さらには、その拠点の 1 つ Vuokatti では人材育成と選手育成強化を並行して実施していたことが明らかとなった。

フィンランドにおける強化策をそのまま日本に当てはめることはできないが、スキー界の発展、スキー関連ビジネス創造の機会を得る可能性を示唆するものである。本研究が冬季オリンピックにおいていまだメダル獲得のない日本クロスカントリーチームの明日への橋頭堡になることを願ってやまない。